

『燃え始めた炎』

「さっきの話、もっと詳しく聞かせてくれない？」

ウィリアムが話を終えた直後、アーリーがレイザに挑戦的な目を向けた。

「あなたのお祖母さんの遺書のこと。調査や対策に役立つ内容じゃないそうだけれど、王国はどのように聖女を連れ出したのか、どういう経緯で神殿が出来たのか。私には知る権利があると思うのだけれど」

「知ってもすべきことに変わりはない」

「俺も聞いておきたい。今回の火山の件が解決しても、アーリーの問題は解決しない。どんなことであっても、出来るだけ情報は得ておきたい」

ウィリアムもそう言うが、レイザは話す必要はないと首を横に振った。

「それじゃ、引換ね。石板に書かれていた聖女の言葉。大体訳せているんだけど、聞きたくないかしら？」

レイザの眉がピクリと揺れた。

そのままレイザとアーリーはにらみ合うように互いを暫くの間、見続けた。

「……いいだろう。だが、お前にだけだ。外してくれるか」

レイザがウィリアムに目を向ける。

「わかった」

仕方がないというように、ウィリアムは二人を残して、その部屋から出た。

そしてすぐ。

ウィリアムは音を立てずに隣室へと入り、壁に耳を当てて集中する。

生立ち故、こういったことは得意だ……。

「聖女が残した子供は女の子であり、この辺りを領地とした王国貴族の私生児として育てられ、洗脳教育を受けた。10代のうちに義兄との間に、一男二女の3人の子供を儲け、この地に移り住み、二十歳になる頃、痣を持って生まれた長女と共に、火山に身を投げて次なる噴火を防いだ。

領主は次女に館を任せ、長男を漁港を管轄するアルザラ家に婿入りさせた。

……長男は、子どもを儲けてすぐ『事故死』している。

次女は2人の子供を儲けた。うち1人に痣があった。

王国は、魔術によるこの地の回復と、火の力を押えるための神殿を設ける代わりに、痣のある子の身柄を求めてきた。

犠牲にするよりはと、次女は娘を王国に渡し、水の神殿が設けられた。それ以降、儀式は行われていない」

「……あなたとあなたの姉に痣があったということは、王国に渡ったその子も早くに亡くなっている、のよね？」

「そうだな。そして、俺の姉も……王国の魔導兵器の実験に使われていたようだ」

「……………」

「痣のある身体に、巨大な魔力に干渉する力があるというのは水の継承者の一族も把握していた。火の魔力は水の魔力よりも、兵器に適しており、継承者の一族の魔力、身体能力も他の属性の一族よりも優れていたため、実験材料、兵器の材料として適した素材だった。

姉と共に両親は王国に渡り、母は姉の処遇を察して、王国に逆らい処刑され、その後すぐに父は別の妻を娶り、王国貴族としての地位と家庭を持った。

……元々、母に継承者を産ませるために選ばれ、派遣された男だったそうだ」

「それで……あなたの家以外で一族の力を持った人は？」

「大抵は若くして事故死している。王国の指示により俺の許嫁とされていた娘がいたが、洪水時に避難したそうだ。残っているのは、リルダ・サラインのみだが、彼女は魔法の習練経験がない。一族の力を持っているかどうかは定かではない」

少し、間をおいてアーリーの声が響く。

「石板にはこう記されていたのよ。

『王国の力で、魔力を抑えると。君が死ぬ必要などない、犠牲など出す必要はない。他にきつと方法がある。力を合わせよう』って騙されたと。

だけれど、王国は何もしなかった。

聖女が子供を産み落とした後、聖女が火山に身を投げる協力だけはしてくれた、と。

石板には、子供も、一族に伝わる聖石も研究のためとされ、奪われたという悲しみと、一族への謝罪の言葉が切々と掘られていたわ」

「……知っている。それも概ね祖母の遺書に書かれていた。俺は、聖女のように自身の未来は望まない。生への誘惑には乗らず、惑わす者は受け入れない。確実に使命を果たす。

信じて欲しい」

「それで、あなたは悔しくないの？ 何故平静でいられるの？

私は——憎いわ」

震えた低い声。深い憎しみがあふれ出ている声だった。  
「何もかもが憎い。  
王国が憎い。兵器開発に協力していた人々、私たちが犠牲に守られてきた人々が憎い。侵略者のくせに、我が物顔でこの地の恩恵を受けていた人達が憎い。  
王国の甘言に負けた聖女も憎い。気持ちは、分かる……でも、憎い」  
アーリーは泣いているようだった。  
「何故、彼等の後始末を私達がしなければならぬの？  
何故、そんな人間たちを命を賭けて救わなければならないの？  
あなただって……本当は、力を持たない普通の人間として、幸せに生きたいんでしょう！？」  
「俺の身体に流れている血の半分以上は、王国貴族の血だ。厳しくも優しい祖母が嫌いじゃなかった。魔法学校教師となった俺を慕ってくれる生徒達を、可愛いと思った。殺したくはない、彼等の未来のために世界を取り戻したいと思った」  
足音が響き、レイザの声が遠くなる。  
「……だが、俺の中に流れる感情の半分は、お前とそう変わらない」  
低く、深い憎しみを感じる声だった。  
ドアが開く音が響き、足音が遠ざかっていった。  
今、彼女の側に行っても、かける言葉が思いつかない。  
目を閉じ、ウィリアムはしばらくその場で深く考え込む……。

こちらのリアクションは以下のP Cに発行されています。  
ウィリアム